

山内善行様(Qlife 代表取締役社長)

過日は訪問診療に同行させていただき、誠に有難うございました。

私は施設への同行経験はありましたが、居宅は初めてでした。各家庭で玄関を上げて靴を揃えるところから新鮮でした。得られた実感は貴重なものばかりです。今後QLifeが訪問診療・在宅医療のコンテンツやツールを制作する際に必ずやこの経験を活かします。

振り返るに、私の一番の感想は「ご家族はえらいなあ。」です。ベッド周りを綺麗に保ったり、様々な介護ケアをするだけでなく、病気のことを勉強し、カタカナ薬剤名をそらんじ、バイタルをマメに記録して。それなりに疲弊しているだろうに、そして家庭内には他の問題だってあるだろうに、我々と話す時には穏やかで、笑って対応する姿に率直に感銘を受けました。これは、皆様(訪問医療者)から受けてきた影響の積み重ねでもあるはずです。

篠田医師と永田看護師のコンビは、普段のパートナーとは違う相手同士のようにでしたが、処置の際にはそんなことを微塵も感じさせぬスムーズな連携と情報補完をしていました。篠田さんがメリット・デメリットを対比しながらの難しい説明をする時には、永田さんが横でうん、うん、と頷く動作を続けて、患者と家族に安心感を与えていました。こうしたチーム医療ならぬ「コンビ医療」の素晴らしさとともに、もう一つ印象に残ったのは、往診とも入院とも介護とも違う「生活医療」の素晴らしさです。排尿に使う容器も家庭にある物から合うものを探し、白湯もその場で家族に用意してもらいます。ベッド横に台がある家庭でも無い家庭でもやることは同じだし、スケジュールも家族主導です。あくまで生活のひだの中に医療行為を混ぜている様子が、よく分かりました。この「コンビ医療x生活医療」が定期的にリピートすることは、ご家族が落ち着いて毎月の療養リズムを刻むためにとても大事なベースになっているだろうと想像します。皆様に訪問を受けているご家庭は、辛さもあるでしょうが、桜新町アーバンに出会えて良かった、幸運だったと思っていることでしょう。

実は私の母(札幌)も、そろそろ在宅を考えなければなりません。オリーブ橋小脳萎縮症です。恐怖をおぼえる対象が増え、恥ずかしいからとか人に迷惑をかけるからと、何かと面倒がる局面が増えてきました。従い、外出機会は避けがちで、哀しいかな人との交流もどんどん減ってきています。そのような患者にとっては、訪問診療は人生晩年での、ごく限られた「人との出会い」の場でもあります。

今後も地域の皆さんに「桜新町アーバンに出会えてよかった」を提供し続けてください。お体に気を付けて。

日野 様(ネグジット総研)

2014年9月17日に訪問診療に同行させて頂きました。お忙しい中、貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

◎診療について

各訪問先では、ご家族との対話が非常に多かったのが印象的です。ドクターがご家族から様子をヒアリングする間に、看護師が患者様の体温/血圧を計り、それらの結果を共有しながら治療方針を決めていく様子は非常に手際が良く、チーム連携がとれていると感じました。見学後、医師と看護師がペアになって訪問するのが桜新町アーバンクリニックの特長だというお話を聞きました。

◎IT 活用について

外出先であっても情報の記録/共有がスムーズに行えるよう、電子カルテ、紙カルテの他、ICレコーダやスマホアプリなど複数の道具をうまく活用しておられました。電子カルテシステムがクラウド化されていけば、転記作業や情報のコピー作業などが減り、さらに効率よく進めることができるのではと思います。